

令和 5 年度

大阪大学

一般選抜（前期日程）

解答例又は出題の意図

国語（HFJE）

令和5年度一般選抜（前期日程）

国語（人間科学部・外国語学部・法学部・経済学部）

出題の意図

I

問題文は、『人類史全史』と『ホモ・デウス』でも知られる歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリ著『21 Lessons—21世紀の人類のための21の思考』（柴田裕之訳、河出書房新社、2021年）の雇用に関する章からの抜粋である。彼の研究の特徴は、通常の歴史学とは異なり人類の歴史と将来的発展という非常に長いスパンを扱った点にあり、『21 Lessons』は、これらの著作で論じられた事柄をトピックごとに簡潔にまとめた著書である。

大学入学後、学生たちは細分化されたそれぞれの研究分野で研究を行うことになるが、ここで得られる専門的な知識とともに、その前提として大局的なものの見方もある必要であることは言うまでもない。ハラリの著作を取り上げた意図は、そうした大局的なものの見方ができるかどうかを問う点にある。また、とくに雇用に関する箇所を取り上げたのは、ハラリが取り上げたトピックの中でも、とくに雇用問題は多くの学生の将来にとっておそらく最も切実な問題となることが予想されるからである。

『21 Lessons』は、論理的であるとともに比較的理解しやすい文体で書かれている。よって、基礎的な漢字熟語に関する知識を有しているかどうか、そして、本文を構成する論理を正確に把握できているかどうかを確認できるような問いを設定した。

II

問題文は、社会学分野の入門書の一部であり、グローバル社会を生き抜くために必要な批判的な想像力を養うことの重要性を記述した部分となっている。本問は、グローバリゼーションという現象について、社会学分野のさまざまな研究成果の内容を理解し、想像力を働かせつつ文章を読み解く能力、長文の説明を限られた時間内に読解する能力を問うものである。

問一は、メタファー的思考について正しく理解できているか、それを実際に使うことができるかを問うものである。「流れ」と「水路」というメタファーを用いながら、グローバリゼーションの諸現象の一つである「国境を越える難民の激増」という現象を的確に説明することが求められる。

問二は、既存の研究成果における主張とそれに基づく筆者の主張を正しく読み取り説明できる能力を問うものである。「渦」という既存のメタファーに筆者が加えた新たな表現について読み取ることが必要になる。字数制限のある中で、筆者の主張を簡潔にまとめるためには、その意図をしっかりと理解することが求められる。

問三は、読解と要約の能力を問うものである。グローバリゼーションに対する人間の姿勢のあり方について文章中の内容を正しく理解し、それに即した説明をすることが求められる。字数制限があるので、本文の内容を要約し、メタファーを用いつつ、的確に説明する能力が問われている。

Ⅳ

明治期に書かれた文であるが、俳諧について論じていて、古文的な世界にある文章である。題材とされている句とともに、文章を正確に読み取り、俳諧の句のように短いものの場合には特に、一字の違いによって意味が異なることを意識して、自らの理解を解答に反映させる力も含めて国語力をみる問題である。

問一 どのような語を重ねて成り立っているものであるかを見極めた上で、「なでふ～や」という文の意味が理解できているかを問う問題である。

問二 「よるところ」の意味を押さえた上で、其角の句と無名抄の歌と枕草子について、筆者が示す関係を理解しているかを問う問題である。

問三 格助詞「を」が「道を歩く」のように移動が行われる動詞を使ってその移動する場所を示すのに対し、格助詞「に」は動きを止めているような動詞しか続かないという、この文章で書かれたことを、自らの日本語の運用能力に照らして理解し、また、動きがある方が歌としてはよいものになる、と発話者である歌人（依平）が考えていることも読み取れることを解答して欲しい問題である。

問四 「三日見ぬまに～」とすると、「三日見ぬまに世の中は～」という具合になり、世の中が変わってしまったことを桜によって知った、というような、「世の中」に焦点をあてた句になると言っていることを読み取れているかを問う問題。

問五 「共に面白きはなし」が、「鍋洗ふ～」の句と「よの中は～」の句の話であり、芭蕉・其角の句の話は関わらぬこと、また、「よの中は～」の句の解釈の多様性の話ではないことを読み取れるかを問う問題。一字（一つの助詞）の違いで句意が大きく変わることがある、という共通点を纏めることも求めている。